

新しい学校行事の創出する「特別活動論」の実践報告

大池 公紀

OHIKE Kiminori

要 旨

本講座は、2017年度後期2年次の教職履修科目「特別活動論」である。履修者は、外国語学部日本語学科7名、英米語学科15名、計22名の学生であった。ホームルーム・学級指導の中で学校行事の意義は大きい。その意義を理解した上で、具体的実践の展開力を育成する新しい学校行事の創造を行った。地域や学校教育目標などの条件を設定し、グループで協力して学校行事を創った。学修形態も座学中心型講義からインタラクティブな学修にしている。

1. はじめに

2016年4月に明海大学教職課程センターが創設された。それまで講師による講義を中心に学習支援を行ってきたが、それを機に、専任教員を中心とする講義展開になり、学修形態もアクティブラーニング（以下AL）を取り入れるなど、座学中心型講義から双方型によりインタラクティブな学修に転換していった。本講義もその中の一環として位置づけられたものである。

本学では、教職課程科目は2年次から履修が始まるが、卒業単位に還元されるわけではないため、履修者は教員志望の覚悟を持って科目選択をしてきている。

2. 指導内容

報告する本講座は、2017年度後期、2年次の教職履修科目「特別活動論」である。履修者は、外国語学部日本語学科7名、英米語学科15名、計22名の学生である。

また、大池は、2016年3月まで東京都立高等学校に勤務した。36年間に渡る教員生活の中で、21

年間は担任、生活指導部等の分掌を経験し、部活動顧問についていた。そして後半の14年間は管理職として勤務したが、その中で学校経営における特別活動の意味を十分に意識して職務に当たってきた。この講座では、この経験を学生が学校現場に赴いた際に実践的に使える資質を与えることが可能である。

本講座の教育活動としては、全体進行のほぼ中期にグループによる学修およびALを取り入れたプレゼンテーション授業を設定した。そこに至るまでの流れと、発表時での発表内容を報告することとする。1講時から15講時までの授業展開は以下の通りである

- 1 特別活動とは何か——個々人の経験の振り返りを通して特別活動を理解する——一人の生徒「明海あけみ」さんを想定して彼女の全学校生活を教科学習と特別活動の視点で検討する。
- 2 中学校・高等学校学習指導要領における、特別活動の位置づけ
学習指導要領における中学校・高等学校の類似点と相違点
- 3 特別活動の中の「望ましい集団活動」の在り方

- 学習集団としてのHR・学級の在り方を、学習者がグループ討議により検討する。
- 4 ホームルーム・学級活動1——目的と自主性・自発性の育成——学級活動（中学校）、ホームルーム活動（高等学校）の重要性
 - 5 ホームルーム・学級活動2——HR・学級の経営の在り方1（担任と学級開きの在り方）学習者は「担任」に対してどのようなイメージを抱いているか、及び担任の仕事の詳細
 - 6 ホームルーム・学級活動3——HR・学級の経営の在り方2（危機的な状況での対応）学級・HR内でのいじめや孤立などに対する危機対応の在り方を討議する。
 - 7 ホームルーム・学級活動4——HR・学級の経営の在り方3（話し合いの在り方）適切な話し合いの在り方をロールプレイを通して検証する。
 - 8 生徒会活動1——目的と活動内容について（貢献とより良い学校生活づくり）——学習指導要領における生徒会活動の意義を確認し、現状の危機を共通理解する。
 - 9 生徒会活動2——生徒会活動の計画と実践（グループ討議と資料作り）——生徒会を「不要ではないか」とする声に対して、どのように応えるかを体験する。
 - 10 学校行事1——目的と学校行事の多様性——学習指導要領における学校行事の5カテゴリーの理解と意義を確認する。
 - 11 学校行事2——儀式的行事、旅行・集団宿泊行事等における教師の職務——各行事における教員の職務について検討を加える。
 - 12 学校行事3——新しい行事の創造と提案1（グループ内検討）第2章で報告
 - 13 学校行事4——新しい行事の創造と提案2（グループ発表）第2章で報告
 - 14 学校行事5——新しい行事の創造と提案3（講評と学校行事について）第2章で報告

- 15 特別活動の総括——全体計画を見直し、意見交換することで実践的な理解を深める

3. 第12～14講時「コンペティション『新しい学校行事を創る』」

(1) 第12講時

① 学校行事についての概論 40分

学習指導要領および生徒指導提要に基づいて、第10・11講義では学校行事の意義とその在り方を学修した。

② 主旨説明 20分

ホームルーム・学級指導の中で学校行事の意義は大きい。その意義を理解した上で、ではどのように学校教育での具体的実践を展開していくか。その力を育成するために、「新しい学校行事」を創り出す実践を行う。地域や学校の教育目標を踏まえて、グループで協力して学校行事を創る。銘打って「コンペティション『新しい学校行事を創る』」とする。

想定する学校・学級は次のとおりである。地方都市の一中学校。学級規模は1学年4クラスの規模。地域との関連も深く、開かれた学校を目指している。その中学校2年生のあるクラスとする。

③ 学修形態の説明

履修者を4グループに分け、1グループを4～5名で構成する。構成メンバーには、学科を超えた人的交流促進とコミュニケーション能力向上を目的に日本語学科学生7名が満遍なく各グループに入るように配置した。

- i 発表グループ毎に資料を作成して、それをもとに説明する。
- ii 資料は、A3版資料を準備する。もしくはpptを活用する。
- iii 資料には、以下のア～キの共通項目を入れるとともに、発表に工夫を加える



- ア どのテーマで取り組むかの方針
- イ 具体的な企画を設立
- ウ その行事のねらい・目的
- エ 準備に何が必要かの検討 例：関係者、依頼先、必要な物品、経費等
- オ 当日に向けて HR で何をするかの計画
- カ 当日の流れ・内容
- キ 事後の指導の内容・方法
- iv 各グループの発表 10～15分
- v プレゼン後フロアからの質問に答える
- vi 評価は、相互シート及び発表内容で行う
- ④ 各グループで今後の方針を検討する 30分
- (2) 第13講義・第14講義
- 各グループのプレゼンテーション

① 第1グループ「球技大会を通じて縦のつながりを深める」

健康安全のための体育的行事では、球技大会を設定する。そこでは、学校全体で、異学年間のコミュニケーションをとることが大きな目的の一つとなる。球技大会を通して、上級学年者が、下級生を指導する、すなわち、学年を縦割りにしての練習や作戦を練ることで、1～3年生のつながりを育成できる。

- i 全体球技大会の日時を設定、発表し体育委員会を招集する。
- ii 体育委員会から各学級へ、1～3年生までを縦割りの組織とすること、上級生が下級生の指導を全て行うことを指示する。

コンペティション「新しい学校行事を創る」	
<p>テーマ 球技大会を通して縦のつながりを強めよう!!!</p> <p>(1) 概式 (2) 区分 (3) 健康安全管理 (4) 実行期間設定 (5) 実施の留意事項 (行事の特徴から一つをマークする)</p> <p>1 行事のねらい・目的 球技大会を通して、低学年・高学年との繋がりを練習や作戦を練ったりして深く、また運動能力の向上を図る。大会を通して学んだことを大会後に振り返り、自分たちがこの経験を通してどのように成長したかをクラス新聞に掲載。</p> <p>2 事前準備・生徒の役割 ○体育委員：取組後に決める、1～3年生までのチーム決め 例) 1年1組、3年5組、赤組など ・種目決め：人気なものを含め、先生が参加できる種目も用意 (キックベースやピンポン球遊びなど) ・審判担当は該当の部活が担当。(人数、種目決め) ・ルール決め (時間、トーナメント (クラス認定あり制)) 例：ドッジボール、総当たり、20分制 ○学級：各学級 ・出場種目決め ・ルール確認 ・スローガン作り ○チーム：HR ・顔合わせ ・作戦会議 ・3学年+先生、競技の選手決め</p>	<p>3 当日の流れ <開会式> ・選手宣誓 ・準備体操 ・体育委員会の挨拶 ・校歌斉唱 →終了後、各チームに分かれる。スケジュール通りに進める。</p> <p><負けた場合> ・応援に回る ・自習</p> <p><閉会式> ・総合優勝 → 遠足プレゼント ・第2位 → 購買500円券 ・各種目優勝チーム → ゴールペン or うまい棒 (選択枝あり)</p> <p><閉会式> ・景品あげる ・結果発表 ・観下位が大会後の片付け免除</p> <p>4 事後準備・生徒の役割 ・チームごとに新聞作成 例：写真掲載、感想、反省 ・体育委員会の反省会 ・3年のみ全体新聞作成 →校内に掲示</p> <p style="text-align: right;">送付先 kofike@meikai.ac.jp</p>

- iii 学年間によって成長の度合いが違うので、キックベースや卓球及びドッジボール総当たり20分制など、運動を苦手とする生徒が参加できるものを実施する。
- iv 1ヵ月前から総合的な学習の時間を同じ時間帯に設定し、縦割りの練習を組む。
- v チームのスローガンづくりなども上級生が全体を指導して進行する。また、部活動を中心にした組織を設立し、当日の運営等にあたることとする。
- vi 全ての終了後、体験を振り返り、自分たちがこの経験を通してどのように成長したかを学級新聞に掲載し掲示する。

[大池コメント] 普通の球技大会との違い、縦割り運営の具体的な指導について検討するように指示を投げかけた。

② 第2グループ「日本人としてのプライドを養う『天皇祭』」

日本伝統文化についての文化的行事。最近の日本人学生は海外学生に比べて自分の国に対しての知識・関心・興味がないと指摘されている。創設したこの行事を通して日本人としての自覚を高めることを目的とする。

- i 「天皇制」に関しての意識に関わるアンケートを事前に実施する。
- ii そのアンケートをもとにいくつかのグループに分けて、グループごとにパワーポイントを活

用しながら発表をする。

- iii 発表後、管理職経験者および歴史を専門とする社会科教員から講評を受ける。

[大池コメント] 以上が発表内容であったが、グループからは事前アンケートやテーマについての具体的な提案がなく、決して十分な内容ではなかった。また、現在の学生は「天皇」「天皇制」に関して十分な認識を持っていない現状に改めて気付かされた。それを踏まえ、10分間のグループ発表の後、学校教育において「天皇制」を扱うことの微妙な課題、学校教育の場では十分なコンセンサスができていない現状を説いた。

③ 第3グループ「地域の伝統文化に触れる、学ぶ」

文化的学校行事。新潟県の中学校を想定して、地域の方々との交流を通して、地域の伝統文化に触れて学ぶ事を実践する。最終的な目的として各クラスごとに伝統芸能・料理の発表会を行い、地域特有の伝統を学ぶ。

- i 学年4学級を郷土料理・伝統芸能に分け、2月上旬に発表会を設定する。
- ii 地域の卒業生・老人会・婦人会・ライオンズクラブなどに中学生が連絡を入れて、企画を説明し、指導の依頼をする。
- iii 地域の方々からの指導は、10月から10回前後の指導を想定する。
- iv 郷土料理は、給食時の提供を検討する。



コンペティション「新しい学校行事を創る」

マ らくらく WEEK

(1)形式 (2)文化 (3)調理実習 (4)旅行計画 (5)動物性産物 (行事の特色からラフをマークする)

1 行事のねらい・目的

TPO に応じた服装を必要とするため、生徒の理解が促される
 課外活動でさまざまなイベントに参加する
 例) 異文化の伝統に想いをこめて、自らの個性を表現することができる
 各国の民族衣装を調べ、発表する
 服装とは違う文化の五人を捉えたりして新鮮で話のネタになったり、異文化交流したい人と交流するいい機会になる。
 各国の重要性を知ることができる。

2 事前指導・生徒の活動

- ・TPO についてどのようなものかしっかり説明して理解させておく。
- ・自分が普段着ている衣服の素材などを調べておく。
- ・自分の衣服に対するイメージを表現できるようにしておく。
- ・素材の機能性についても調べておく。
- ・この行事のねらいについてもある程度説明しておく。
- ・他国の衣装についてもある程度調べておく。

生徒の活動

上記のことについてしっかり理解をし分らなかったら聞いて理解したうえで下調べなどして準備を完璧にしておく。

3 当日の流れ

- ・私服で登校をして午前中は普通に授業をつける。(1～2まで授業)
- ・お昼から国の料理を体験する。(3～4で家庭科の授業として料理を作る)
- ・部活単位で集まる。
- ・いろいろな人と交流をする。
- ・レポート作成に入る。
- ・初日から4日までこの流れを進める。
- ・最終日はレポートをまず完成させる。
- ・各国の衣装を着て各国の人たちに説明をする。

4 事後指導・生徒の活動

- ・この行事のまとめをする。(レポートなど)
- ・発表をし、考えを共有する。
- ・人の発表を聞いて思ったことを書く
- ・感想や反省などを話し合う。
- ・行事を通してこれから生かそうなことを考える

グループメンバー(氏名) 池田、佐藤、藤本、山野

送付先 kohike@meikai.ac.jp

[大池コメント] 郷土料理指導では衛生面の課題があるため、衛生面の関連から給食指導との連携を検討し、地域によっては保健所への申請が必要であることを指摘した。また、地域に独特の伝統文化がなかった際の代案の提示を検討することとした。

④ 第4グループ「らくらくウィーク」

文化的行事。2020年の東京オリンピック・パラリンピックを視野に入れて、異文化理解教育を衣装の面から学習する。異文化の衣装に触れること、自らの服装を客観的にみることを通じてTPOに応じた服装を、意識をもって選ぶ。そこで生徒自身の判断力が試される。1週間をかけて継続的に午後を中心に時間を当てる。

- i 学級内を3チームに分けて学年12カ国の指定をする。
- ii 各グループが、各国の衣装を調査しレポートにまとめるとともに、家庭科等の授業を使って実際の衣装を紙素材でつくる。
- iii 完成後、発表の時間を設定して12カ国の文化と作成した衣装を発表する。

[大池コメント] 設定時間の詳細な提案が必要である。また、家庭科教員の負担軽減のための再提案を検討させた。

4. 課題

まず第一に、学生の準備不足があげられる。内容を理解するための取り組み、共通理解に至るまでの話し合いが、いずれのグループにおいても不十分であったことは否めない。10分のプレゼン予定が20分程度に伸びたチームもあり、プレゼンテーションの方法について等の事前指導についても、さらなる改善が必要である。また内容的にも未熟な部分が見られ、グループ内で十分な検討が加えられているとは言えないものもあり、学科をまたいだ検討時間の設定に難しいものがあることが分かった。今後は、さらに学校の詳細な学校経営方針や時間設定なども共通項目として条件を明示して、より教育課程に位置付けられた学校行事を意識して指導にあたっていくことが必要である。